

「横浜再生の基軸」

横浜はその開港以来、日本近代史において世界と向き合う窓口であり、世界との結節点であった。また、厚木に降り立ったマッカーサーが、ヨコハマ・グランドホテルで日本での活動を開始し、沖合に停泊したミズリー号での降伏文書サインで日本の戦後史をスタートさせたことを想起しても、戦後日本の出発点であった。

改めて、21世紀の日本を展望し、コロナ禍を超えて日本を再生させる起点として横浜が果たすべき役割を模索・構想する中で、以下の5点を「横浜再生の基軸」として提起したい。

1. 医療・防災産業の中核拠点としての横浜

- ・横浜というスーパー中核港湾都市としてのポテンシャルを生かすためにも、後背地の産業構造を未来志向型のものへと進化させる必要がある。何よりも、震災、パンデミックなどの災害を体験した今、国民の安全・安心を支える産業構造の構築が重要である。
- ・そのためには、日本の新たな基幹産業として、医療・防災産業を神奈川、横浜に創生するプロジェクトを推進する。
- ・例えば、山下埠頭の再開発に関し、「医療船構想」（災害時に機動的に活動できる大型医療船の建造・オペレーション構想）を実現し、その中核基地とする計画を推進したい。
（注）医療船を有効に稼働させるためには、それを支える医療施設が地上に配備される必要あり。とくに平常時と非常時にしっかりと機能する医療体制（医療機器・施設のみならず医師・看護師の確保など）の整備が不可欠で、最も深刻なパンデミックにも対応できる「BSL-4レベル」の臨床研究施設を併設することなども検討すべきである。
- ・また、山下埠頭などに、防災拠点を整備し、移動可能な大型高機能コンテナを集積し、非常時の備蓄、医療・検査機能、蓄電、避難住居などを提供できる体制を整備する。

2. 高付加価値観光を推進するプロジェクトの実現

- ・「カジノ主眼のIR」ではなく、真の統合型リゾートを目指し、より付加価値の高い国際観光都市横浜を実現する。
- ・とくに、高度の健康診断の受診を目的とする医療ツーリズムとともに、先端的産業開発に挑戦するプロジェクトを配置した産業ツーリズムを構想、推進することが必要である。
- ・例えば、神奈川県の実食自給率（カロリーベース）がわずか2%にまで落ち込んでいることに鑑み、先端的技術を注入した「巨大植物工場」などを実現し、市民が食と農の「生産—加工—流通」に参画する先進的食料サイクル都市を目指す。また、「食品ロス」を削減する省資源・リサイクル都市を実現するプロジェクトを推進する。そうした先進的試みに挑戦する「横浜モデル」を実現し、その現場を見学したいとする経済人・産業人を世界中から惹きつけていきたい。

3. 市民参画型のデジタル先進都市横浜の実現

- ・行政主導の行政効率を高めるためのデジタル化ではなく、産官学連携で市民生活に恩恵をもたらすDX先進都市を目指す。
- ・とくに、医療情報（例えば血液検査、ゲノム情報）のデジタル化や教育関連情報のデジタル化によって、より多くの市民の安心・安全を高めるための基盤を構築する。
- ・DXには光と影が併存しており、情報セキュリティの確保、個人情報保護などに細心の配慮をしたネットワーク情報社会の実現を目指す。

4. 文化創造・発信都市横浜の実現

- ・横浜は、音楽、スポーツ、演劇、美術などあらゆる文化のメッカとなり、発信基地となることを目指したい。
- ・そのためには、横浜が蓄積してきた文化遺産（例えば中華街、みなとみらいの諸文化施設など）の上に、「多文化共生」を強く意識した街づくりを目指し、その中核的シンボルとなる先端情報技術を注入した国際会議場、劇場、博物館、美術館、スポーツ施設などを集積させたい。

5. 「子育て先進都市」としての横浜の創造

- ・「日本で最も子育てのしやすい街」になるように、柔らかい発想で基盤を整備する。
- ・例えば、「待機児童ZERO」の子育て基盤のみならず、ひとり親の就業支援、地域の食材を生かした「子ども食堂」や奨学金制度のきめ細かい整備など、社会が力を合わせて子ども・若者を育てる環境を実現する。
- ・社会的体験を蓄積してきた高齢者が、子育て、教育、地域文化活動に参画できるシステムを構築し、健康な高齢者が社会を支える存在として機能する街づくりに挑戦したい。

2021年7月22日